

私が父の松葉杖になって思うこと

出雲市立斐川西中学校 三年 宮松龍希

昨年の冬、父が新型コロナウイルスに感染しました。症状は軽かったので普通に家でバタバタしていました。数日経過し、検査結果は陰性となり、いつもの日常に戻りました。戻ったと思っていました。しばらくして父の胸やお腹に痺れが出て、その痺れは手や足へと広がっていきました。近くの病院へ行って、治療を受け、胸やお腹、手の痺れはなくなりましたが足の痺れは以前より強くなり、次第に感覚が鈍くなり、歩行がぎこちなくなっていました。総合病院で検査したところ、新型コロナウイルス感染により脊髄炎という病気になってしまい、下半身に麻痺が出ていると言われ、その後は数ヶ月にわたって検査や治療を行っていましたが、今年の春、後遺症として下半身の麻痺が残り、その改善は見込めないと分かりました。

父は、私の野球の練習やランニングに付き合ってくれ、元吹奏楽部ですが体を動かすことが好きな父でした。そんな父は今、左足を引きずるように歩いています。走ることも跳ぶことはもうできません。幸いにも全く動かないわけではなく、スムーズに動かないだけなので、車の運転や仕事も今まで通りできています。単純な日常的な動作が不自由そうで、キャッチボールやランニングなどは当然一緒にすることはできなくなりました。

そんな父の様子を見ていると、今まで気にしていなかったことがすごく気になるようになりました。平らな道を歩いていても、つまづくことがあります。今では、何でもないような小さな段差でも足を引っかけてしまうことがあるようで、その前で立ち止まり、踏み越えていくことがあります。先日、私の試合の応援で野球場に来てくれた時、観客席に向かう階段に手すりがなかったため、母の肩を借りて上り下りをしていました。また、外食した時、席を立つ時もすぐに動き出すことができず、少しストレッチをした後、片づけに来た店員さんに「すみませんでした。」と謝って席を離れていました。今までの父と行動が違うなど思っていた時、父がこんな事を言っていました。

「自分は歩くことが困難になっただけで他は何も変わっていないつもりだけど、最初は周りの人達の見目が少し気になっていた。変な目で見られているのではないか。迷惑な人だと思われているのではないか。憐れみの目で見られているのではないか。だからあまり外出したい気持ちにもならなかった。でも、自分の周りには決してそんなことはなかった。近所の祭りの準備に出かければ、温かく迎えてくれて、手助けはしてくれるけど無理のない程度に仕事を任せてくれる。気づかいはしてくれるけど腫れ物に触るような態度はしない。自分で病気のことをネタに笑い話をすれば今まで通り笑いで返してくれる。今までと何にも変わらない付き合いをしてくれる。自分が気にしてたのが馬鹿らしい。でも、まだ自分の病気のことを知らない人と接するのはやはり少しだけ抵抗がある。」

父にとっての日常は、病気によって大きく変わっていました。私自身、今まで何とも思っていなかった道や建物などの生活環境が、障がいのある父のような人にとってすごく生活

しにくい場合がある事に気づきました。そして、いつもは冗談ばかり言ってふざけたり、私
が間違っただけをされると厳しく叱ってくれる父でも、心の中ではそんな弱気な部分がある
ことが分かりました。

父は私のことをふざけて「頼りになる杖みたいだ」と言います。手すりの無い階段の上り
下りや、長距離の歩行のときに肩を貸しているからです。周りの人から見れば不思議に見え
るかもしれませんが、身近にいる自分が父の安全な移動の手助けをしてあげたいと思っ
ています。今の自分には父が安全に移動できるように社会環境を変えるだけの力はありません。
自分の体を使ってサポートすることくらいしかできないので、肩を貸して支えになるだ
けでなく、買い物に行った時に重い荷物を運んだり、今までしてこなかった手伝いをすすん
でしたりするようになりました。

世の中には、父のような人、父より重い障がいを持った人がたくさんいると思います。私
一人でみんなの助けになることはできません。私は、身近な父に接することで色々なことに
気づくことができました。大きなことはできなくても、自分のできる範囲内でのサポートが
十分その人の助けになること。その人に対し必要以上に憐れみの感情をもつことはかえっ
て相手を傷つけかねないこと。気遣いは必要だがその人にリスペクトを持って今まで通り
の対応をすることがその人を元気づけることがあること。できるだけ多くの人に、このこと
に気づいてもらえれば、温かい輪が広がっていくと思うので、父のサポートを今後も続けな
がら、多くの人に自分の経験を伝えていきたいと思っています。